

2023年の御言葉は「狭い門から入りなさい」(マタイの福音書 7:13)でした。今朝はそれを覚えつつ、詩篇 23 篇から学んでいきます。この詩篇はスポルジョンが旧約聖書の真珠と言ったほどに、最もよく覚えられていると言っても過言ではないでしょう。記したのはダビデです。



1. 伴ってくださる主 (1~2節)

①主は羊飼い (1)「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。」

詩人ダビデは「主は私の羊飼い」と述べます。主とは創造主なる神です。ダビデはこの時既にイスラエルの王でありましたが、かつては羊飼いでありました。エッサイの末の子であった彼は羊の番をしていた時に、預言者サムエルから、油を注がれたのです(1サムエル 16:15)。彼は琴をひきつつ、詩をうたう人でした。今ここで、自らを羊にたとえ、主こそが自分の羊飼いであると歌っています。かつてダビデは羊飼いでした。そこで、羊にとって羊飼いは絶対に必要な導き手であることをよく知っていました。羊飼いがいなければ草を食むこともできません。草が生えている所へと連れていってもらわなければならなかったからです。しかし、羊飼いがいれば、安心です。ついて行けば良いのです。まさに「私は乏しいことはありません。」と述べた通りだったのです。

②緑の牧場に (2)「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」

羊にとって、緑の牧場に行き着けることはただ恵みです。自分の力や判断では、迷ってしまい、とんでもない所に辿りついてしまいます(ルカ 15章参照)。緑のある所でなんの心配もなく、食することができることはありがたいことなのです。羊飼いはそればかりでなく、水がある所にも羊たちを導きます。かつてヤコブが旅を続け、ある井戸へとさしかかった時に、羊たちが水を飲んでいました。そこで、彼は羊飼いであるラケルと出会ったのです。(創世記 29章)。ヤコブも後に羊を飼う仕事をしました。

2. たましいを生き返らせて下さる主 (3~4節)

①義の道に (3)「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」

詩人は羊というたとえではなく、自分自身のことを語っています。主が自分のたましいを生き返らせてくださると告白します。渇いていた魂に生き生きとした清新なものがよみがえってきたのです。それは、魂への食べ物と水が備えられたからでありましょう。イエス・キリストは「わたしはいのちのパンです」(ヨハネ 6:48)と言われました。また「わたしを信じる者は、聖書が言っているように、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」(ヨハネ 7:38)と言われました。ダビデはまさに、キリストからのパンや水を得るのと同じ経験をしたのです。そしてなおかつ、主が御名のために、義の道へと導いてくださるとも告白するのです。



②死の陰の谷 (4)「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが、私とともにおられますから。」
イスラエルには下を見れば断崖絶壁の谷の道がありました。それは「死の陰の谷」というのがぴったりでした。しかし、そこを歩くことがあったとしても、彼はわざわざを恐れないというのです。それはなぜでしょう。主がともにいてくださるからだというのです。それほど、主の御臨在は、信仰者にとって貴重だというのが、ダビデの確信でした。

③むちと杖 (4)「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」
羊飼いにあっての必需品はむちと杖でありました。むちには鉄の金具がついていました。狼などをお追ひ払うためです。キリストは十字架につく前の受難週にむちを受けました。杖は羊たちに方向を示す時に使われました。また、自分自身が歩く支えでもありました。そして、主が用いて下さるむちと杖は、詩人を守り支えてくださるものであるがゆえに、力強い慰めだったのです。

3. 主の家に住もう (5~6 節)

①頭に油を (5)「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油を注いでくださいます。私の杯はあふれています。」

羊にとっての敵は狼などでありましょうが、詩人にとっては何だったでしょうか。王になる前であれば、彼をつけねらうサウロ王だったかもしれません。これはそれより後に表された詩です。彼に反対するそのような者達がいるなかでも、主は必要な霊的な食事を与えて恵みと平安を与えてくださったのです。そして、油は主人が客人に振舞うものですが、主はそのような恵みを頭から、溢れるほどに与えてくださるのです。

②いのちの日の限り (6)「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。」

ダビデにとっての確信は、主の慈しみと恵みとが、自らのいのちの日の限り、つまり人生の終わりに至るまで変わることなく、自分を追うようにして備えられるというものでした。実を言うと、敵も彼を追ってきて悪をともに行うように試みているのです。でも、一方的に、犠牲的に、出し惜しみなく主の恵みや慈しみが後を追ってくるので、敵はなすすべがないのです。

③主の家に (6)「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」

であればこそ、詩人であるダビデは宣言するのです。「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」と。私たちの祈りにおいても、主の前に、「私は、ずっと主の備えてくださる家に住みます」と告白したいものです。それは、主が私たちに備えてくださる見えない住まいです。祈っているときに、私たちは聖霊が与えてくださる霊的な主の家に住まうのです。そして、真の平安と喜びがもたらされることになるのです。

《結論》

高校生の時、通っていた横浜の教会に羽鳥君がいました。高校も同じで一学年上でした。彼の両親はクリスチャンでした。ところがある時、癌が発見されて、召されたのです。教会で葬儀が行われました。たくさんの彼の同級生達がそこに参列しました。その葬式で、日曜学校の校長先生だった竹内姉がこの詩篇 23 篇を読み上げたのです。「たとい死の陰の谷を歩むとも、私はわざわざを恐れませんが、あなたが、私とともにおられますから」。その日から、この部分は心に響いて、ずっと忘れられない御言葉となりました。

今朝は、その詩篇 23 篇を読んできました。この一年、「狭い門から入りなさい」に導かれてきた私たちですが、信仰者ダビデはイエス・キリストの教えの極意を、主からあらかじめ示されたかのようにここに告白しています。即ち、ダビデは主からの恵みをたっぷりいただいていました。それは 1 節の「主は私の羊飼。私は乏しいことはありません。」に明言されています。彼は自らが羊のように弱く、愚かな者であることを自覚しつつも、羊飼いである主が導き、必要のすべてが満たされていることを確信していたのです。また、清新な霊の息吹きをいつも主からいただき、慰められ、励まされていました。

しかし、そのダビデにも「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが」とあるように、試練や困難があったようです。彼はそれを「死の陰の谷」という言葉で表していますが、死と隣り合わせのような現実があったのです。しかし、彼は「恐れない」と告白しています。なぜでしょうか。「あなたが、私とともにおられますから。」とあります。どんなに危険な時にも、主が共にいてくださると確信していたので、恐れなかったのです。彼にとって、主の御臨在は最大の支えであり、希望でありました。

プロテスタント教会において、聖書の次によく読まれてきた書に「天路歷程」(1687 年)があります。ジョン・バンヤンによるものです。クリスチャンという名の人物が、天国に至るまでの行程を記していますが、様々な試練に遭遇します。「死の陰の谷」を通る経験もします(邦訳 124 頁以降)。彼が道を進もうとすると、戻ってくる人達がいるのです。理由を聞いてみると、とんでもなく恐ろしいそうところだ、引き返した方が良いというのです。しかし、クリスチャンは進みます。確かにそこは、すぐにも死に至りそうな危険な所でした。恐ろしい物音や、神を冒瀆するような声も聞こえてきます。その時、彼に聞こえてきたのが、この詩篇 23:4 節でした。そしてクリスチャンは、夜のような死の陰の谷を越えて朝を迎えるのです。

「狭い門から入りなさい」と教えられた主は、「いのちに至る狭い道」を進む時に与えられる祝福を示して下さっています。さまざまな主を否定するような声が聞こえて来ることもあるでしょう。とても巧みな誘い掛けの言葉が近づいてくるかもしれません。しかし、狭い門から入る道は、私たちに祝福をもたらします。慈しみと恵みが私たちを追ってくるのです。仮に恐れが襲って来る時も、「主がともにいてくださる」と言い聞かせ、信じて進んでいこうではありませんか。一年を感謝します。来年も主の家に住まい、恵みをいただいでいきたいと思います。